

児童生徒が日印両国の良さを実感できるような教育活動の展開

前ニューデリー日本人学校 教諭

栃木県下都賀郡壬生町立壬生中学校 教諭 小 澤 茜

キーワード：国際理解教育，現地理解教育，地域社会との連携

1. はじめに

日本との違いに不便や不満を感じながらインドで生活している子どもたちは多い。インドに来た子どもたちがよく口にするのは、「インドは汚い」「インド人は自己中心的」などという否定的な言葉である。中には現地の人々に対し、あからさまに攻撃的な、あるいは馬鹿にしたような態度を示す日本人の子どもたちもいる。

そんな中、インドの文化を理解し、日本人である自分たちがインドにいる意義を見出すことは、そうしたストレスを解消し、生活全般を生き生きとさせることにつながる。また、子ども時代を海外で過ごすことをプラスととらえ、「民間大使」として、文化的な違いを越えて現地の人々と良好な関係を築いていく態度を子どもたちに養うことができると思う。

2. 活動の実際

(1) インド文化の理解

① ヒンディ語

子どもたちにいろいろと提示する前に、まずは自分自身がインド文化や現地社会に通じていなくてはならないと思い、余暇の時間を利用してインドならではの習い事やさまざまなサークル活動に積極的に参加し、そこで得たことを学校の教育活動で生かすよう心がけてきた。

文化を理解するには現地の言葉の習得が不可欠である。最初の1年間でヒンディ語を習い、日常会話はできるようになった。学校で数回ヒンディ語講座を開催したが、子どもたちだけでなく保護者も多数参加していた。また、学校で働く現地スタッフと、通訳をはさまずヒンディ語で会話することによって、業務を円滑に行うことができた。教員が現地スタッフと和気あいあいと話している場面を子どもたちに見せることは、インド人に対する誤解を解消する助けにもなるのではないかと思う。

② ボランティア活動

インドに生活していると、どうしてもない貧富の差を目の当たりにする。交差点で車を止めていると、ほろを着た幼い子どもたちが小銭をもらうため窓ガラスをノックしてくる。これは、初めてインドに来た日本人の子どもたちにとってはショッキングな光景である。

ちょうどヒンディ語学校の先生が、スラムの人々を助けるボランティア団体「Hands Together」を運営していたので、私もその団体が運営するスラムの子どもたちのための補習校に足を運んだ。インドの多くの子どもたちにとっては、学業よりも家事の手伝いが重要であるため、学習時間を確保できず学校の勉強についていけなくなってドロップアウトしていくことが多いのだという。「Hands Together」の補習校では、そうした子どもたちのケアをしている。

こうした現状を日本人学校の子どもたちにも知ってもらおうと、先生にも来校してもらい、日本人学校で公演会を開催する他、2008年7月、学校全体で寄付活動も行った。中学部の生徒が中心となって学校全体に呼びかけ、衣類やおもちゃなどの寄付を募ったのだ。全校生徒からの寄付により、文房具528点、衣料品・衣料雑貨338点、書籍67点、おもちゃ225点が集まった。寄付された品々は後日スラムの子どもたちに届けられ、大変喜ばれた。

③ インド音楽

インドに赴任してから、前々から興味があったシタール（インドの弦楽器）を習い始めた。毎週日曜日の夜に、シタールの先生が我が家へやってきて、マンツーマンで教えてくれる。レパートリーが増えてくると、タブラ（インドの打楽器）の先生も来るようになり、ちょっとしたセッションを楽しむことができた。やがて「シタールを弾く日本人」として、SWAYAA（青年の船）や現地企業の開催する日印交流イベント等に呼ばれて演奏する機会もいただいた。日本人学校で行われる現地理解体験の行事「ナマステ！インディアデイ」ではインド音楽ブースで現地の音楽の先生と子どもたちとの間に立ち、インド楽器の体験活動を円滑に進めることができた。



2009年8月 コンサート「太鼓と歌のタベ」にて

(2) 音楽活動を通して

① 日本人学校の役割

日本人学校は、インドに住む日本人にとってコミュニティセンターのような役割も果たしている。週末には子どもたち向けのサッカーや野球、バスケット、空手、柔道、バレエなどのサークルが活動している。一方、子どもたちが活動している間、和太鼓会やゴスペルサークルといった、大人（主にお母さん方）向けのサークルもある。夕方になると土曜出勤のお父さん方が仕事帰りに参加している混声合唱団もあった。中にはいくつも掛け持ちしている方もいらっしゃる。

学校で活動するとなると、どうしても「顧問」といった形で教員の手が求められる。子どもたちが参加しているスポーツ系のサークルは、腕の立つ男性の先生方がご自分のお子さんも一緒に入れて指導にあたっていたが、音楽関係のサークルは、自ずと音楽教師である私が一手に引き受けることになった。日本の中学校で週末に部活指導をしていたのが、日本人学校では社会教育に取って代わった感じだった。

こうしたサークル活動を通して、保護者と良好な関係を築くことができたということは大きなメリットであった。

② 和太鼓

日本文化発信の重要なツールである和太鼓は、前任の先生方が現地の職人さんに頼んで、マンゴーの木とバッファローの皮で作らせたものである。週末に活動している和太鼓会だけでなく、当然ながら学校の教育活動でも活用されている。総合的な学習の時間で、小学部5年生はお囃子、6年生は和太鼓演奏に年間を通して取り組んでいる。さらに活用しようと、少々強引ながら、運動会の全校器楽パレードのアレンジにも盛り込むようにした。運動会など、学校行事には交流校の先生方も見えるので、和楽器を用いたアレンジは新鮮に映ったようだ。



2009年10月 運動会 鼓笛パレード「手紙～拝啓十五の君へ～」

③ 音楽で人をつなぐ

学校の外では、インターナショナルな現地の合唱サークルにも参加し、音楽を通して現地の人々とも積極的に交流した。2008年4月にはオペラ「カルメン」の合唱隊として、また、2008年9月にはブロードウェイの名曲を歌って踊るミュージカル「The Magic of Broadway」のシンガーとして出演した。また、そこで親しくなった現地の人々とバンドを組んで、ホテルやショッピングモールで歌うこともあった。

2009年8月には和太鼓や日印の合唱団、インド音楽など、自らの音楽関係のつながりを統合して、Japan Foundationでコンサート「太鼓と歌の夕べ」を企画・開催した。インド人クワイヤーのメンバーも加わって日本語の歌と一緒に歌ったり、ハリウッドダンサーズも登場したりして、見に来ていた日本人学校の子どもたちにも好評であった。大人が心から楽しんだり、がんばったりしている姿を身近に見ることができるというのは、子どもたちにとっても大きな刺激になると思う。

3. まとめ

子どもたちがインドの不便さや不満を口にする場合、大概は大人たちが言っていることの受け売りである。たとえば多くの駐在員家庭では現地人のハウスタッフを雇っているが、「運転手は待つのが仕事だから」「メイドにやらせればいい」という信じられない言葉を、平気で子どもたちが口にしたりする。しかし、それはよく大人たちが、大人同士の会話の中で言っていることなのだ。

在印中、積極的に地域社会と関わり、自らインドを愛し、理解しようと努めてきた。その心は子どもたちにも伝わったのではないかと思う。異文化に触れて、好奇心を刺激されない子どもはまずいないだろう。大人自身が偏見を捨て、そうした異文化と純粋な気持ちで関わっていく姿勢を見せることで、子どもたちの好奇心の芽を育てることができると考える。